

P.1・ベストプラクティスコンテストに参加
・ハートアイランドわたかのプロジェクト

P.2・伝統のディベート大会開催！
・四日市大学公開講座を実施
・四日市東ロータリー出張講演会を開催

P.3・環境情報学部の学生による施設見学
・三重県主催の多文化共生企画に参加

P.4・鳥羽トリックアートプロジェクト
・第20回全日本ソフトテニスシングルス選手権大会出場決定
・秀作卒論に四日市大学学会から表彰

ベストプラクティスコンテストに参加

三重県主催の平成25年度ベストプラクティスコンテストが3月1日(土)にアスト津にて開催された。このコンテストは地域の課題解決に取り組む学生団体に発表の場を与えて、その活動例を紹介させるとともに、会場参加者の投票で特に優れた団体に賞を与えるもの。

今年度で2回目となるこのコンテストに、三重県内の高等教育機関から12組が参加し、四日市大学からは「地パト(地域パトロール)」と「ETVよっかだい」が参加した。なお、「いのちのキャンパス実行委員会」など四日市大学の学生が個人で参加している団体の発表もあった。それぞれの団体の発表の分野は、医療福祉、商店街活性化、地域防犯、地域研究、児童支援、地域の情報発信など多岐にわたった。発表後、会場からの投票と審査員4名による審査が行われた。四日市大学の2団体は受賞を逃したが、このコンテストに向けて準備をし、多くの人の前で発表できたことが、学生たちにとっては大きな経験となった。



ハートアイランドわたかのプロジェクト

ハートアイランドわたかのプロジェクトは総合政策学部の岩崎恭典・小林慶太郎研究室のゼミ活動の一環として取り組んでいるもの。三重県志摩市にある離島の渡鹿野島は風待ち港や観光地として栄えていたが、近年は高齢化、人口減少が深刻で対策が急務となっている。

ゼミ生を中心とした研究室一同は、2012年に初めて渡鹿野島で合宿を行い、島民の方の案内で島内を散策し、島の現状を知り、また、島の魅力ある資源を探し、今後の方向性や、どのようにして島をPRしていくか考えて提言を行った。以後、何度も渡鹿野島に足を運び、島民の方と議論を交わしてきた。その中で、島がハートの形をしていることから、島を「ハートアイランドわたかの」と名づけた。古いイメージを払拭し、島の情報を発信していくためにFacebookのページを立ち上げ、今年2月にはカップル向けのイベントも行い、参加賞としてハート型のピンバッジや入浴剤、渡鹿野名産のあおさをプレゼントするなどした。

研究室のゼミ生は、「ハートアイランドが、島民主体で持続、発展していけるよう、連携して今後もまちおこしに取り組みたい。」と語った。



伝統のディベート大会開催！

総合政策学部では、1年生後期の演習(ゼミ)として、2004年度以降毎年、ゼミ対抗のディベートに取り組んでいる。ディベートとは、あらかじめ決められた論題について、肯定側・否定側の2つの立場に分かれて、自分たちの主張の根拠となる客観的な証拠を積み上げて討論を行うもの。肯定・否定のいずれの立場が与えられるかは、当日まで分からないため、プレイヤーは両方の立場を準備する必要がある。これにより、一面的な物の見方に陥ることなく多角的に物事を捉える力が養えると考えられている。また、ディベートのための準備作業を通じて、資料を調べたりする整理したりする能力、口頭での発表や討論によるコミュニケーション力、しっかりした論拠に基づいた論理を組み立てる思考力など、大学での学修に必要な様々なスタディスキルを、総合的に身につけさせることもできる。

今年度のテーマは「日本はヘイトスピーチを法律で規制すべきである。是か非か？」というもの。それぞれのゼミで準備を重ね、一度予選を行った上で12月18日(水)にトーナメント形式で決勝大会を行った。少々難しいテーマにも関わらず、「規制の対象が曖昧だと拡大解釈され表現の自由が脅かされないか」「人種差別撤廃条約に反する状態であるのに放置しておいてよいのか」「先進諸国での規制には問題はないのか」など、様々な観点から議論が行われた。

2つの教室で計10試合が行われたが、最終的に勝ち抜いてきたチーム同士が戦う決勝戦では、最後まで白熱した討論が行われた。終了時にはジャッジに回った敗戦チームの学生たちから大きな拍手が沸き起こり、お互いの健闘を称え合った。



四日市大学公開講座を実施

四日市大学公開講座「地域が求める四日市大学」が3月8日(土)に開催された。地域の方々を中心に招き、ゆったりとした雰囲気の中で行われ、約50名が参加した。今回のテーマは「地域に愛され地(知)の拠点となる」で、宗村南男学長の挨拶のあと、3名の教員が発表を行った。

鬼頭浩文教授(総合政策学部)は「地域に役立つ人材育成」という内容で、東日本大震災の支援、四日市トンテキのB-1グランプリ出場、地域パトロール、サンタ列車などの地域貢献活動を紹介し、これらの活動に学生を参加させることで学生が成長し、大学の使命である人材育成に役立っていると報告した。そのほかにも、新田義孝教授(環境情報学部)は「地域に根ざした研究の推進」という内容で地域関連の研究を紹介し、また松井真理子教授(総合政策学部)は「生涯学習の場としての大学」という内容で、本学が提供する社会人に向けた生涯学習システムについて詳しく説明した。熱心な質疑も行われ、有意義な公開講座となった。

四日市東ロータリー出張講演会を開催

2月25日(火)、四日市東ロータリークラブ所属で(有)オカモトハウジング代表取締役の岡本文浩氏を招いて「業界の動向と自社の経営を語る」をテーマに講演会を実施した。これは、実践経営学習、就職活動を支援する東ロータリークラブの企画で、中小企業に興味がある、あるいは、起業を考えている留学生の参加を期待したものだ。岡本氏がどのようにして大工になり、どのようにして現在の会社を設立したか、また、起業してどのような点が難しく、どのような点に働き甲斐を感じているかを、中学時代から現在に至るまでのライフステージを含めて講話いただいた。

中国、ベトナム、ネパール、フィリピン、ペルー出身の留学生からは多くの質問や意見が出て、「これほど質問が多い学生向け講演会は初めて。」とのコメントがあるほど活発な話し合いとなった。

環境情報学部の学生による施設見学

2月6日(木)～7日(金)に、環境情報学部の学生13名にエネルギー環境教育研究会メンバーの先生方を加えた総勢16名が、岐阜県本巣市の根尾谷地震断層観察館、静岡県御前崎市の静岡県漁業協同組合連合会の温水利用研究センター、中部電力浜岡原子力発電所を見学した。この見学会は中部原子力懇談会三重支部の厚意により実現したもの。現在、国内では原子力発電の稼働のあり方についての意見が分かれているが、現実の施設をしっかりと自分たちの目で見ることが重要と考え、このような見学会を学部教育に取り入れている。

根尾谷断層は明治24年に東海地方を襲ったマグニチュード8の直下型濃尾地震で生じたもので、1995年の阪神淡路大震災の断層の高さが約1.2mであるのに対し、ここは6mもある。その最大の高さを示す場所が地震断層観察館として保存されている。

浜岡原子力発電所は2011年5月に政府から停止要請を受け、その後は津波と地震対策を大規模に推進している。学生たちは、大きな振動にも耐えられるような対策や、東海・東南海・南海の3連動地震を想定した22mの防波堤を砂丘の後ろに1.6kmの長さで建設している工事現場を見学し、圧倒されていた。防波堤は固い岩盤まで直接杭を打って万全の対策をしていて、日本では最高峰の対策とのこと。

今回、地震断層、原子力発電所、温水利用の種苗生産(魚介類の卵からの稚魚の育成と放流を行う栽培漁業センター)の施設と、現代のエネルギー問題やその漁業への利用を象徴する施設を見学したことで、学生たちは大変満足していた。



三重県主催の多文化共生企画に参加

12月21日(土)、3大学連携多文化理解イベントリレー「Hand in Hand! みえの地球市民2013」に、本学留学生と日本人学生が協力して出展した。

本学からは、中国・ネパール・ベトナムの展示ブースのほかに、「現代の移民について」という学生のプレゼンテーション、そして三重県企画による「3大学留学生による異文化理解トーク」にも参加した。これらは全て、留学生支援センターの企画である「多文化共生社会を考えるプログラム」の参加者が1年間かけて準備してきたもの。

「現代の移民について」は、四日市市や三重県の現状を紹介しながら、実際に自分でアンケートを実施したり、ディスカッションを重ねて完成したもので、「日本に住む外国人は困っていない、困っているのは日本人ではないか？」など、前提を覆すような意見も出たなかで「たとえ外国人が必要でないと思っても、多文化共生社会は必要である」という結論を得た。

一方、展示ブースでは中国の十字繡、ベトナムのコーヒー、ネパールのチャイや民族衣装試着などが好評で、訪れた人々はこれらの国についての説明を受けながら学生たちと歓談した。「異文化理解トーク」では、本学総合政策学部の小林慶太郎教授がコーディネーターとして進行を務め、四日市大学、三重大学、鈴鹿国際大学の留学生が一人ずつスピーカーとして参加した。本学からはネイミョーティハハンさんが参加し、「ミャンマー人の良いところは大国の中にありながら独自性を維持していること、良くないところは相手の感情を傷つけないような表現方法の教育を受けていないこと。」と、わかりやすく自国の特徴を説明した。参加した学生たちは、ほかのブースを訪れたり、桂三輝さんの落語を聴いたりして一日を過ごし、「楽しかった、機会があればまた参加したい」という感想が聞かれた。



鳥羽トリックアートプロジェクト

2月10日(月)～12日(水)にかけて、環境情報学部の学生8名が鳥羽市を訪問し、老舗旅館戸田家の倉庫の壁に大きなトリックアート(だまし絵)を描いた。この活動は、鳥羽市の市外区や商店街の活性化を目指す取り組みの一環で、戸田家からの依頼で実現したもの。約半年前から計画を練り、多くの学生に依頼してデザインを提出してもらい案を絞り込んだ。第1作目として、まずは戸田家の倉庫にスナメリが額縁から飛び出すデザインを選んだ。

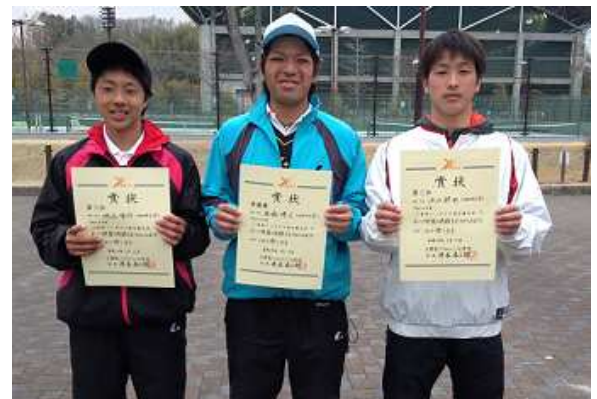
ペンキを使って絵を描く作業は学生全員にとって初めての経験で、資材の選択からわからないことが多く苦労したが、毎週打合せを行って計画を進めた。3日間の現場作業で完了できるかが1番の不安要素であったが、幸い天候にも恵まれ、学生の一致協力と戸田家の食事・宿泊面でのサポートを受け、作業を完成させることができた。完成した作品名は「スナメリの海」。「この絵が地域の活性化の一助となれば。」と学生たちは話した。



第21回全日本シングルス選手権大会出場決定(ソフトテニス)

3月16日(日)三重県営鈴鹿スポーツガーデンテニスコートにおいて平成26年度第20回全日本ソフトテニスシングルス三重県予選会が開催された。結果は、一般男子の部で惜しくも優勝を取り逃がしたが、準優勝に金城博人さん(総合政策学部3年)、3位に浜口祥也さん(総合政策学部4年)と池上陽介さん(総合政策学部1年)が入賞した。3名は、5月17日(土)～18日(日)に愛知県一宮市で開催される「第20回全日本ソフトテニスシングルス選手権大会」に三重県代表として出場が決定した。

金城選手は、2年ぶり2回目の出場、浜口選手は3年連続出場、池上選手は初出場となる。



秀作卒論に四日市大学学会から表彰

3月15日(土)、平成25年度学位記授与式が挙行政され、その卒業式後の謝恩会で経済学部部会主催の学生懸賞論文卒業部門の表彰式が行われた。主席の伊藤克美さんは「ガラパゴス化する日本の産業」での丹念なデータ収集と精緻な分析が、また、次席のチンヨウさんの「BOP ビジネスと日本の中小企業」と伊藤大介さんの「LCCを国内公共交通機関として発展させるためには？」は独創性などが高く評された。

経済学部では卒業論文を必修にしており、論文提出後には内容や形式について口頭試問が行われ、複数の教員による審査を受ける。卒論の執筆を通して、ほぼ全員、最低限、基本的に正しい日本語の文章が書けるようになることを目的としている。この表彰は、そうした卒論の中からさらに選ばれた秀作に対して与えられたもので、受賞者の中には大学院に進学する者もあり、優れた卒論を書くことの重要性が改めて確認された表彰といえる。

これまでのPick Up Topicsはホームページでご覧いただけます。

<http://www.yokkaichi-u.ac.jp/examinee/topic.html>



「四日市大学 入試広報室(YokkaichiU)」
入試情報や最新のニュースを掲載しています。

YOKKAICHI UNIVERSITY Pick Up Topics

学校法人 暁学園 四日市大学

【発行】入試広報室

〒512-8512 三重県四日市市萱生町1200

TEL:059-365-6711 FAX:059-365-6630

<http://www.yokkaichi-u.ac.jp/>



P.4